

目 次

凡 例	6
仏伝諸經典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧	
【01】 ディーパンカラ仏から記別を受ける	12
【02】 兜率天に住む	14
【03】 兜率天において世間を観察する	15
【04】 釈尊の家系	
[01] 先祖・種姓	17
[02] 親族	24
【05】 入胎	
[01] マハーマーヤーの夢	27
[02] 占師が夢を占う	30
[03] 胎内で十カ月を過ごす	31
【06】 出胎	
[01] ルンビニー園へ	33
[02] 三十二種の瑞兆	34
[03] 誕生	35
[04] 「天上天下唯我為尊」と宣言する	37
[05] 「サルヴァールタシッタ」と命名される	38
[06] 「天中天」の異名	40
[07] アシタ仙人の予言	41
[08] 三十二相・八十種好	44
【07】 マハーマーヤーの死	45
【08】 マハーパジャーパティー乳母となる	47
【09】 太子の教育	
[01] 学問	48
[02] 種々の競技	49
【10】 提婆達多が射た雁を助ける	50
【11】 樹下の禪定	51
【12】 結婚	
[01] 妃の選択	53
[02] 婿選びの種々の競技	55
【13】 三つの宮殿に住む	56
【14】 四門出遊	57
【15】 夫人の懐妊とラーフラの誕生	60
【16】 出家の前兆	
[01] 浄飯王の夢	61
[02] マハーパジャーパティーの夢	62
[03] 太子夫人の夢	62
[04] 菩薩の夢	64
【17】 出家	
[01] 美女たちの熟睡中の姿態	65
[02] 出城	66
[03] 悪魔が出家を止めようとする	68
[04] 真識が道標となって天道を示す	69
[05] 剃髪し、狩人と衣服を交換する	69
【18】 バッグヴァ仙人を訪問する	72
【19】 ビンビサーラ王と逢う	73

【20】 2 仙人を訪問する	
[01] アーラーラ・カーラーマ仙人を訪問する	75
[02] ウッタカ・ラーマプッタ仙人を訪問する	77
【21】 苦行	
[01] ウルヴェーラーへ	78
[02] 5 人の侍者が菩薩と共に苦行に入る	80
[03] 6 年間の苦行	81
【22】 苦行を捨てる	
[01] 苦行が悟りに役立たないと知る	82
[02] 5 人の侍者が菩薩を見捨てる	84
【23】 成道	
[01] 村の乙女の供養	85
[02] ネーランジャラー河で沐浴する	87
[03] 前正覚山に上る	88
[04] 龍王カーリカの讃歎	89
[05] 草刈り人のクサ草献上	90
[06] 菩提樹下の誓い	92
[07] 降魔	93
[08] 菩提樹下の成道	95
【24】 解脱を楽しむ	
[01] 悪魔が涅槃に入れと誘惑する	98
[02] アジャパーラ樹下にて	100
[03] ムチャリンダ樹下にて	101
[04] タプッサとパッリカの供養と帰依	103
[05] ディーバンカラ仏の因縁	105
[06] 天神が呵梨勒果を献じる	106
[07] 天女が糞掃衣を献じる	107
【25】 梵天勸請	
[01] 説法を決心する	107
[02] アーラーラ・カーラーマとウッタカ・ラーマプッタの死を知る	110
【26】 ウパカに遇う	112
【27】 初転法輪	
[01] 五比丘と会う	113
[02] 中道を説く	116
[03] 四諦三転十二行相を説く	117
[04] コンダンニャに法眼生ず	119
[05] 善来比丘戒	121
[06] 他の 4 人に法眼生ず	122
[07] 無常・苦・無我を説く	123
[08] 五比丘心解脱す	124
【28】 ヤサの教化	
[01] ヤサに法眼生ず	125
[02] ヤサの父が優婆塞となる	127
[03] ヤサ阿羅漢果を得る	127
[04] ヤサを侍者とする	128
[05] ヤサの母と妻が優婆夷となる	129
【29】 ヤサの 4 人の友人の出家	130
【30】 ヤサの 50 人の友人の出家	131
【31】 富楼那の帰仏	132
【32】 那羅陀の帰仏と龍王の帰依	133

【33】 娑毘耶の帰仏	134
【34】 弟子たちを布教に出す	135
【35】 悪魔を破す	136
【36】 弟子たちに弟子を取ることを許す	137
【37】 三歸具足戒を定める	138
【38】 30人の賢衆の出家	139
【39】 ガンジス河の船師の出家	140
【40】 ウルヴェーラーの牧女が優婆夷となる	141
【41】 三迦葉の帰仏	
[01] ウルヴェーラ・カッサパの帰仏	142
[02] ナディー・カッサパとガヤー・カッサパの帰仏	144
[03] ガヤーシーサ山において阿羅漢果を成じる	146
【42】 法雨林の苦行者の教化	147
【43】 ビンピサーラ王の帰依	
[01] 釈尊を訪ねる	148
[02] 王に法眼生ず	150
[03] 5種の願	151
【44】 竹林園の寄進	152
【45】 舍利弗と目連の帰仏	154
【46】 大迦葉の帰仏	157
【47】 王舎城の人々の非難	159
【48】 故郷へ帰る	
[01] 浄飯王が釈尊の帰郷を切望する	160
[02] ウダーイが帰郷を促す	161
[03] カピラヴァットウへ	162
【49】 ナンダとラーフラの出家	
[01] ナンダの出家	164
[02] ラーフラの出家	165
[03] 浄飯王の依頼	167
【50】 祇園精舎の寄進	
[01] スダッタ長者の帰依	167
[02] 精舎建設を發起する	169
[03] ジェータ太子の園林を買い取る	170
[04] 祇園精舎の完成と寄進	172
【51】 波斯匿王の帰依	172
【52】 釈迦族の子弟の出家	174
【53】 ゴーシタ園の寄進	176
【54】 ウデーナ王の帰依	177
【55】 舎衛城における神通	177
【56】 三十三天でマハーマーヤーに説法する	178
【57】 マハーバジャーパティー・ゴータミー最初の比丘尼となる	180
【58】 アングリマーラの教化	181
【59】 提婆達多の破僧	182
【60】 ヴェーランジャーにて馬麦を食する	185
【61】 諸弟子の教化	186
【62】 パータリ村の繁栄を予言する	189
【63】 ナーディカ村の人々への授記	190
【64】 アンバパーリーの帰依	192
【65】 竹林村で最後の雨安居を過ごす	194
【66】 入滅を決心する	195

【67】	ボーガ城における説法	197
【68】	チュンダの供養	198
【69】	スバツダの帰仏	199
【70】	最後の説法	201
【71】	涅槃	202
【72】	葬儀	
[01]	火葬	204
[02]	舍利の分配	205
〔付表1〕	仏伝諸経典および仏伝関係諸資料の エピソード別出典一覧表	209
〔付表2〕	仏伝諸経典および仏伝関係諸資料の 成道後七週間のエピソード一覧表	230

凡 例

[1] 本「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」（以下「要覧」という）は次のような目的のもとに作成された。すなわち

- (1) 釈尊の生涯を伝えた「仏伝諸経典」の記す諸エピソードを比較対照して、その所在を示すこと
- (2) 仏伝諸経典の記すこれら諸エピソードが、「原始仏教聖典」のどこを拠り所としているかを調査して、その所在を示すこと
- (3) 後世に中国・タイ・ビルマ（ミャンマー）などにおいて作られた「仏伝関係諸文献」が上記(1) (2) をどのように継承しているかを調査し、その所在を示すこと

である。

以下これをそれぞれ【B資料】【A資料】【C資料】と称する。本「要覧」表題中の「仏伝諸経典」はこのうちの【B資料】を指し、「仏伝関係諸資料」は【A資料】【C資料】を指す。

なお(2)でいう「拠り所」は、具体的に拠り所となったと考えられる原始聖典名とその所在はもとより、伝承の基底をなすと考えられる思想や文化的背景も含める。これに関しては故中村元博士の『ゴータマ・ブッダ』（「中村元選集・決定版」第11、12巻）に多大の恩恵を蒙った。記して謝意を呈しておきたい。

また漢訳資料の収集には、CBETAの電子資料を活用させていただいた。このような貴重な資料を無料で公開されている中華電子仏典協会に敬意を表するとともに、深甚の謝意を表したい。

[2] 本「要覧」のエピソード項目は次のような方針で立てられている。

[2-1] 本「要覧」は、「仏伝経典」が取り上げている「釈尊の伝記」中のエピソードにはどのようなものがあり、それが「仏伝経典」や「原始聖典」「後世の仏伝資料」の、どの文献の、どこに、どのように、記述されているかを示すことを第1目標としたものである。

したがって、ここに取り上げた「エピソード」は「仏伝経典」に取り上げられているエピソードのみであって、「仏伝経典」が取り上げていないエピソードは含まれない。

例えば原始聖典には、成道直後に傲慢なバラモン（*huhuṅkajātika brāhmaṇa*）が現れて、釈尊と真のバラモンとは何かを問答するというエピソードが伝えられているが、これはどの「仏伝経典」にも含まれていないので、取り上げられていない。

念のために言えば、このようなケースは枚挙にいとまがなく、「仏伝経典」が取り上げている釈尊伝エピソードは、「原始聖典」が伝える釈尊の生涯に係わるエピソードのほんの一部分で、おそらく1%にも満たないであろう。もちろん「仏伝経典」の制作者もこれを知っていたであろうが、それが釈尊の生涯のどの時点のエピソードであるかの判断がつかなくなったなどの理由で、やむなく放置されたのでありと考える。

また、たとえ「仏伝経典」にあるエピソードでも、それがただ一つの経典にしか取り上げられていない特殊なエピソードで、しかも「原始聖典」にその出所が見出せないような場合は、採用しなかった。そのようなものまで取り上げると、際限がなくなるからである。ただしそのようなケースでも、例えば成道直前に菩薩が、「前正覚山」に登られたというエピソードのように、よく知られたものについては採用した。

[2-2] 「項目」は原則として、一つの完結したエピソードを単位として設定したが、エピソードがいくつかの複数のエピソードから構成されている場合は、その下に「枝番号」を付して、細分化して示した。「拠り所」となっている原始聖典がそれぞれ独立した経になっている場合を目処としたが、編者の恣意的な判断に基づいた場合も少なくない。前者については、単に原始聖典の編集上の必要性（例えば、*Samyuttanikāya* や *Aṅguttaranikāya* などの小経の場合）に過ぎないかもしれないが、もともとは別の伝承が一つにまとめられたという可能性がないではなく、その判断材料

となると考えたからである。

逆に例えば舍利弗と目連の帰依などは、「仏伝」のエピソードとしては、まず舍利弗がアッサジに遇って「縁起法頌」を聞いて法眼淨を得るエピソード、それを聞いて目連も法眼淨を得るエピソード、そしてサンジャヤの弟子250人と一緒にサンジャヤのもとを離れて、釈尊に帰信するエピソードというように、3つに分けることも可能であるが、原始聖典にこれを区別して伝えるものがないので一つの項目とした。

[2-3] エピソードとして取り上げた項目は上記のような原則にしたがっているが、なお恣意的な部分も残されており、それが項目の精粗のバラつきとなって現れているのではないかと恐れている。すべての「仏伝経典」のエピソードを、白紙の状態からカードにとって項目を立てたものではなく、先行の釈尊伝(特に中村博士の『ゴータマ・ブッダ』)が取り上げているエピソードの出典を探すということから始めたために、このような結果となった。今はこれを反省しているが、これをやり直す余裕がなかったために、そのまま残されている。

[2-4] 項目名は簡潔を旨としたため、これを繋げれば「釈尊の伝記」がイメージできるというようには立てられていない。そこで、各「項目」のもとに、その項目に含まれるエピソード内容を簡略に記しておいた。これを見ればその内容のおおよそは想像されるはずである。ただし「仏伝経典」によって記事内容が異なるので、厳密を期すことは難しく、けっしてすべてを網羅したものではなく、といて最大公約数的なものでもないことを了解されたい。したがって、本文中に示す一つ一つの文献の記事内容が、この項目内容の説明から外れる場合も存することを留意願いたい。

[2-5] 項目およびその内容説明中に含まれる人名・地名の表記は、パーリ語のあるものはパーリ語を用いることを原則とした。ただし一つ一つの文献の記事内容の紹介部分は、サンスクリット語文献はサンスクリット語を、漢訳文献はその文献の使用する漢訳語を用いている。しかし要約して示した部分に含まれる、固有名詞を除く仏教語についてはそこまで配慮していない。

[2-6] 項目中に「帰依」「出家」「帰依」という、同じような意味を有する用語を用いているが、これは以下のような基準に基づいている。「帰依」は在俗者が仏教の在家信者となった場合(優婆塞あるいは優婆夷となったと表現した場合もある)、「出家」は在俗者が出家して仏教の比丘・比丘尼となった場合、「帰依」は他の宗教の出家修行者が、釈尊の教えに帰した場合、である。

[3] 項目の配列順序は原則として「釈尊の生涯」の時系列に従っているが、「仏伝経典」によって順序に違いがあり、歴史的事実はもちろん、「仏伝経典」の最大公約数的なものを見いだすのも困難である場合が少なくない。そこで大体の方針としては、まず“Nidānakathā”に記述のあるものはこれに従い、“Nidānakathā”に記述のない部分ではできるだけ諸「仏伝経典」のなかから最大公約数的な順序を見いだす努力をした。しかし現段階ではほとんどまだ仮説の段階である。この総合研究―「原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」―は、「原始仏教聖典」資料と「仏伝経典」や後世の「仏伝関係諸資料」を総合的に検討して、釈尊の伝記を明らかにしようとしているのであるから、その結果を見て修正したい。

なお“Nidānakathā”を中心にしたのは、本モノグラフシリーズの第1号に掲げた本研究の「目的と方法論」に書いたように、本研究はパーリの伝える釈尊伝イメージの再構築を第1目標とするからである。

[4] 【A 資料】 【B 資料】 【C 資料】 の区分は便宜的なものにすぎないが、次の基準によった。
【A 資料】 ; パーリの「経蔵」「律蔵」に含まれる文献と、大正新脩大蔵経の「阿含部」「律部」に収録されている文献。ただし「律部」は『四分律』『五分律』『僧祇律』『十誦律』『根本有部律』などの広律を対象とした。したがって『根本有部律』の「破僧事」や「出家事」などに含まれる説話的なものは、原始聖典資料と見なすことが躊躇されるが、これも含まれている。ただし『善見律毘婆沙論』のような律の注釈類は除外した。

【B 資料】；大正新脩大藏經の「本縁部」に収録されている「仏伝經典」と目される文献と、それに相応するパーリ・サンスクリット文献。この具体的な文献名と使用したテキストは別に掲げる。

【C 資料】；仏伝に係わる中国・タイ・ビルマ（ミャンマー）撰述の文献。この具体的な文献名と使用したテキストは別に掲げる。

したがってここには論蔵や、アッタカター、ないしは大乗經典中にちりばめられている仏伝資料については採取されていない。またチベット文献についても採録する余裕がなかった。

[5] 資料の紹介に際しては、一つ一つの文献に番号を付した。それは、その項目に該当するエピソードをどの文献が伝え、どの文献が伝えないかを一目して判別せんがためである。その番号とここに使用したテキストは以下の通りである。

[5-1] 【A 資料】に含まれる仏伝記事は原則として断片的であり、単独では時系列における先後関係が判らない。そこで全体的に検討しなければならない。しかしその系統によって、差異があることも予想されるので、系統別に分けて番号を付した。

①=パーリ聖典 Vinaya, DN.MN.SN.AN.KN.のすべてを含む。

②=長阿含 後秦 仏陀耶舎共竺仏念訳 『長阿含經』22 卷 (大正第 01 卷 pp.001 上～149 下)

③=中阿含 東晋 瞿曇僧伽提婆訳 『中阿含經』60 卷 (大正 01 卷 pp.421 上～809 下)

④=雜阿含 劉宋 求那跋陀羅訳 『雜阿含經』50 卷 (大正 02 pp.001 上～373 中)

⑤=別訳雜阿含 失訳 『別訳雜阿含經』16 卷 (大正 02 pp.374 上～492 上)

⑥=増一阿含 東晋 瞿曇僧伽提婆訳 『増一阿含經』51 卷 (大正 02 pp.549 上～830 中)

⑦=四分律 姚秦 仏陀耶舎共竺仏念等訳 『四分律』60 卷 (大正 22 pp.567 上～1014 中)

⑧=五分律 劉宋 仏陀什共竺道生等訳 『弥沙塞部和醯五分律』30 卷 (大正 22 pp.001 上～194 中)

⑨=十誦律 後秦 弗若多羅共羅什訳 『十誦律』61 卷 (大正 23 pp.001 上～470 中)

⑩=僧祇律 東晋 仏陀跋陀羅共法顕訳 『摩訶僧祇律』40 卷 (大正 22 pp.227 上～549 上)

⑪=根本有部律 唐 義淨訳 『根本説一切有部毘奈耶』50 卷、『根本説一切有部苾芻尼毘奈耶』20 卷、『根本説一切有部毘奈耶出家事』4 卷、『根本説一切有部毘奈耶安居事』1 卷、『根本説一切有部毘奈耶随意事』1 卷、『根本説一切有部毘奈耶皮革事』2 卷、『根本説一切有部毘奈耶藥事』18 卷、『根本説一切有部毘奈耶羯恥那衣事』1 卷、『根本説一切有部毘奈耶破僧事』20 卷、『根本説一切有部毘奈耶雜事』10 卷 (大正 23 pp.627 上～1057 中、大正 24 pp.001 上～414 中)

⑫=その他 「その他」には異訳の「涅槃經」やサンスクリットの 'Mahāparinirvāṇa-sūtra'、その他の漢訳の単訳經など、雑多なものが含まれる。

テキストについては、パーリ聖典は PTS 版、漢訳は大正新脩大藏經を使用した。なおサンスクリットの 'Mahāparinirvāṇa-sūtra' は中村元訳の「遊行經 上・下」(仏典講座 1 大藏出版社 1984.9、1985.2) と Ernst Waldschmidt の "Das Mahāparinirvāṇa-sūtra" (Rinsen Book Co. 1986) を利用した。

また【A 資料】の最後に、1 字下げにした上で、*を付し、文字を若干小さめにして示したものは、直接「仏伝經典」の記事とは関係しないが、参考として掲げておいたほうがよいと判断されたものである。

[5-2] 【B 資料】において取り上げた文献の略号とその使用テキストは以下の通りであり、番号は漢訳年代の順序によった。ただし異訳經典と原典は近くにまとめた。なお、漢訳年代は仏書解説大辞典によった。

- ①=NK. *Nidānakathā* (*Jātaka* vol. I, 南伝大蔵経 第28巻)
 ②=修行 後漢 竺大力共康孟詳訳(建安2, 197) 『修行本起経』2巻 (大正03巻 pp.461上~472中)
 ③=中本 後漢 曇果共康孟詳訳(建安12, 207) 『中本起経』2巻 (大正04巻 pp.147下~163下)
 ④=瑞応 呉 支謙訳(黄武2~建興2, 223~253) 『太子瑞応本起経』2巻 (大正03巻 pp.472下~483上)
 ⑤=異出 西晋 聶道真訳(太康初~永嘉末, 280~312) 『異出菩薩本起経』1巻 (大正03巻 pp.617中~620下)
 ⑥=普曜 西晋 竺法護訳(永嘉2, 308) 『普曜経』8巻 (大正03巻 pp.483上~538上)
 ⑦=方広 唐 地場訶羅訳(永淳2, 683) 『方広大莊嚴経』12巻 (大正03巻 pp.539上~617中)
 ⑧=LV. “*Lalitavistara*” (Lefmann本 名著普及会 1977, 外蘭幸一『ラリタヴィスタラの研究 上巻』大東出版社 平成6年, 溝口史郎訳『ブツダの境涯』東方出版 1996)
 ⑨=僧伽 符秦 僧伽跋澄等訳(建元20, 384) 『僧伽羅刹所集経』3巻 (大正04巻 pp.115中~154中)
 ⑩=十二 東晋 迦留陀伽訳(太元17, 392) 『仏説十二遊経』1巻 (大正04巻 pp.146上~147中)
 ⑪=仏讃 北涼 曇無讖訳(玄始3~同15, 414~426) 馬鳴菩薩造『仏所行讃』5巻 (大正04巻 pp.001上~054下)
 ⑫=BC. “*Buddhacarita*” (E.H.Johnston本 Calcutta 1935, 原実訳『大乘仏典 13』中央公論社 昭和55年, 梶山雄一外訳『原始仏典 10』講談社 昭和60年)
 ⑬=行経 宋 釈宝雲訳(元嘉年中, 424~453) 『仏本行経』7巻 (大正04巻 pp.054下~115中)
 ⑭=過去 劉宋 求那跋陀羅訳(元嘉21~同30, 444~453) 『過去現在因果経』4巻 (大正03巻 pp.620下~653中)
 ⑮=集経 隋 闍那崛多訳(開皇7~同11又は12, 587~591or592) 『仏本行集経』60巻 (大正03巻 pp.655上~932上)
 ⑯=MV. “*Mahāvastu*” (É.Senart本 名著普及会 1977, J.J.Jones 英訳本 London 1949)
 ⑰=衆許 宋 法賢訳(雍熙2~淳化5, 985~994) 『衆許摩訶帝経』13巻 (大正03巻 pp.932上~975下)

[5-3] 【C資料】として取り上げた文献の略号とその使用テキストは以下の通りである。中国撰述については制作年代順に番号を付したが、その他については恣意的に配列したものである。これらの制作年代の研究は別の機会に行いたい。なお、制作年代は仏書解説大辞典によった。

- ①=釈迦 梁 僧祐撰(天監1~17, 502~518?) 『釈迦譜』5巻或10巻 (大正50巻 pp.001上~084中)
 ②=歴代 隋 費長房撰(開皇17, 597) 『歴代三宝紀』15巻 (大正49巻 pp.022下~127下)
 ③=氏譜 唐 道宣撰(麟徳2, 665) 『釈迦氏譜』1巻 (大正50巻 pp.084中~099上)
 ④=統紀 宋 志磐撰(咸淳5, 1269) 『仏祖統紀』54巻のうち4巻 (大正49巻 pp.129上~169上)
 ⑤=JM. “*Jinakālamāli*” (A.P.Buddhadatta PTS版 1962, 畑中茂訳『*Jinakālamāli* 試訳研究』昭和55年度東洋大学大学院修士論文)

⑥=Bigandet “The Life or Legend of Gaudama” (London 1911、赤沼智善 訳『ビガンデー氏緬甸伝』無我山房 大正3年 なお、Bigandetに記したローマ字表記は、その英文テキストに記されているものである。)

[6] 項目に立てたエピソードに対する各文献の記事内容は以下のように示した。

[6-1] できるだけ原文あるいはその和訳を引用するようにした。しかし長文となる場合は、冒頭部分のみを掲げて以下を省略した。しかし中間を省略した場合もある。いずれの場合も省略部分には……を用いた。したがって、一々の紹介記事が、「項目」に立てた内容のすべてを含んでいるわけではないので注意されたい。

[6-2] またストーリーがあって長文となる場合は梗概を記した場合もある。この中に原文を引用する場合は、その部分を「 」で括った。

[6-3] 一々の紹介記事が、上記のうちのどれに当たるかは注意しなかったが、おおよその見当はつくはずである。

[7] 所在ページは、記事冒頭のページ数のみを示した。したがって記事が数ページに亘る大きなエピソードを、もとのテキストに溯って確認しようとする場合は、ここに示したページ数に続く後の数ページをもご覧いただきたい。

なお‘Buddhacarita’は章と偈の番号で示した。

[8] 本表を材料として、近いうちにこれらを分析しての論文を作成するつもりであるので、本「要覧」ではあえて一切の論評を差し控えた。したがって注記は必要最低限に止めた。

[9] 巻末に掲げた「付表」は以下のような目的のもとに作成した。

[9-1] 「付表1」の「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典一覧表」は、本「要覧」の形式では明らかになし得ない、それぞれの文献（あるいは系統）が、エピソードの一つ一つを、釈尊の生涯のなかで、どのような順序にあるものと把握していたかを知るために作成した。また、これによって、エピソードの一つ一つをどの経典が伝え、どの経典が伝えないかが、一目して明らかになるはずであり、さらにこれによって、仏伝経典間の系統や、原始聖典を含めた系統なども知るよすがとなりうるであろう。

[9-2] 「付表2」の「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料の成道後七週間のエピソード一覧表」は、文献によって釈尊成道後7週間の順序と記事内容に大きな相違があるため、それを整理しようとしたものである。

[9-3] 以上二つの「付表」の凡例については、当該個所を参看されたい。

[10] 本資料集は森章司・本澤綱夫・岩井昌悟の共同作業によるものであるが、その役割分担は以下の通りである。

まず岩井が作成した【B資料】を中心とする粗原稿を、本澤が補修するとともに、【C資料】を書き加えて、【B資料】【C資料】の原稿を作り、これに基づいて森が最後に【A資料】を調査した。その上で、項目の設定や内容説明の文章作成など、この完成に至るまでには、しばしば共同研究者全体（本号の「はじめに」で紹介させていただいた合計6名）の研究会を開いて、討議した。

なお、本「モノグラフ篇」はわれわれ自身がパソコン上で版下まで作成しているので、その編集・入力作業には多大の労力を必要とするが、共同研究者のうちの中島克久には、今回は脇役に回ってもらって、その労をとってもらった。またその助手として、東洋大学の学生である大久保美美さんには、大変お世話になった。

したがって本資料集は、文字通りの共同研究のたまものであるが、もし瑕疵ありとすれば、その

責任は代表者の森にあることは言うまでもない。